



## 受難の主日（枝の主日）（マタイ 27:11-54）

正しい人を正しい人と証言する信仰

受難の主日、聖なる一週間を迎えました。この一週間で、一年分の恵みをいただくようなつもりで過ごしていきましょう。

「受難の朗読」について少し説明したいと思います。受難朗読は、古くから聖金曜日の主の受難の記念祭儀に行われていました。きょうの主日にも受難朗読をするのは、主日ごとにキリストの生涯の主な出来事を記念していくためです。現在の朗読配分では、毎年聖金曜日にヨハネ福音書が読まれ、他の福音書は受難の主日に三年周期で読まれます。今年がA年なので、マタイ福音書です。

受難朗読は福音朗読の中でも最も重要な部分で、特別に長い朗読になっています。本日の「聖書と典礼」に掲載されていない長い形（マタイ 26・14-27・66）は、ユダの裏切り、最後の晩餐から始まり、イエスの遺体が墓に納められるところまで続きます。また、伝統的に受難朗読を分担して朗読するようになっているのは、キリストの受難の出来事をより生き生きと再現するための工夫です。

朗読から二つのことを取り上げたいと思います。一つはマタイが、イエスの死の場面に、すでにイエスの復活後のことを書いているということです。「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。」（27・51-53）

福音記者は、イエスの十字架上の死が、すでに迫害の中にある教会共同体にとって、さらに墓に眠る聖なる人々にとって、希望となることは明白であると教えようとしているのです。

もう一つは、ピラトの妻が伝言で、「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」（27・19）と証言したことです。ピラトも無罪を確信していましたが、ユダヤ人群众はその頑なさのために致命的な過ちを犯したのです。

わたしたちは繰り返し受難の朗読に耳を傾けています。わたしたちもまた、イエスは十字架の上で亡くなられたのち復活することを理解してこの典礼にあずかっています。そうであるなら、マタイ時代の教会共同体や、墓に眠る聖なる人々と同様に、わたしたちも十字架上のイエスを希望の源として仰ぐ必要があります。声に出して、十字架上のイエスはわたしたちの希望ですと、表明する必要があります。また、十字架上のイエスの前にたたずむわたしたちは、あえて罪を犯したりして心を頑なにしてはいけません。

これから始まる聖週間は、「すべての人をご自分のもとに引き寄せる」（ヨハネ 12・32 参照）イエスに導かれていく一週間です。